

1996年度のおもな調査

第267次調査全景（東から）

中央右寄りの東西方向の高まりが東区朝堂院南面築地SA17010で、この右が朝堂院、左が朝集殿院である。東朝集殿SB6000は調査区南辺で基壇北端のみがみえている。SB6000の北では2条の東西溝（北からSD16940、SD17350）、SD17350に北から合流する南北溝SD17351などを検出した。画面手前の南北方向の高まりは朝集殿院東面築地SA5985である。

本文4頁参照（撮影／牛嶋 茂）



第273次調査発掘区全景（北から）

神祇官東院（奈良時代後期）の基壇建物2棟の柱想定位置に人柱を配した。平安宮と同様に平城宮の神祇官も北を正面としている。写真奥の正殿では地覆石の抜取のみを検出し、基壇は削平されていた。手前の前殿では地覆石の抜取と礎石据付の根石をほぼ同じ面で検出し、基壇が低かったことがわかる。

本文31頁参照（撮影／佃 幹雄）

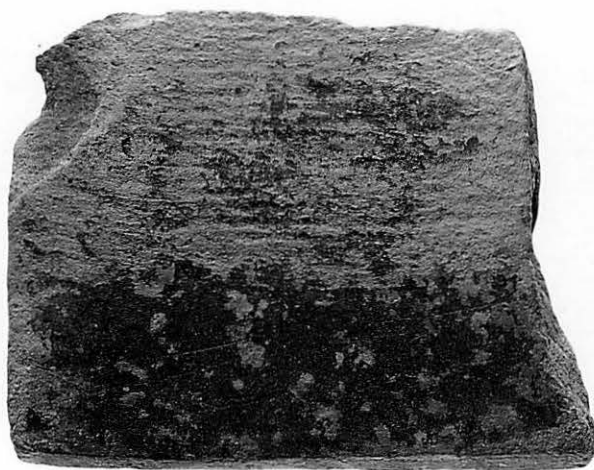


平城京左京二条二坊十一坪
(第279次) 出土の二彩蓋
ゆるやかな曲面をもつ二彩
陶器の破片で、軟質の素地
に濃緑と白の二彩が施され
る。凸面側に刻線で亀甲文
をあらわしている。鉛釉陶
器での類品をみないが、平
城宮出土の須恵器碗の蓋に、
亀甲文を施した同工の製品
がある。

本文48頁参照
(撮影/佃 幹雄)

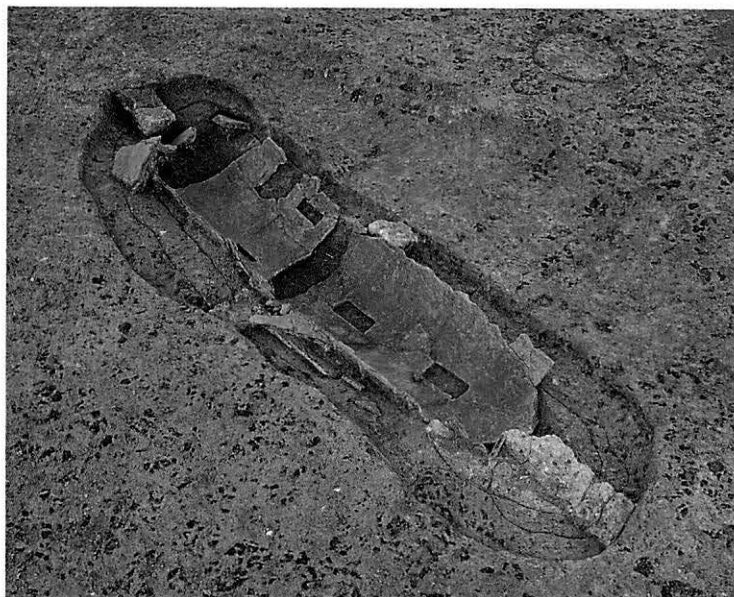
平城京左京二条二坊十一
坪 (第279次) 出土の緑釉
熨斗瓦

淡緑色の釉が瓦凸面の半
分弱の幅と一方の側面に
施されている。これは屋
根の棟に熨斗瓦を積んだ
時に外部に露出する部分
を意図してのことである。
十一坪出土の施釉瓦の9
割が熨斗瓦であり、棟に
だけ施釉瓦が使われてい
たと思われる。南接する
十二坪で出土した680点
におよぶ施釉瓦の9割が
平瓦であることと対照的
である。本文47頁参照
(撮影/佃 幹雄)



第270次調査で出土した埴輪棺

諸付円筒埴輪2本を利用した埴輪棺で、短辺を朝顔形埴輪等で閉塞し、中には玉類が副葬されていた。4世紀末から5世紀前半ごろのものと思われる。当時、この埴輪棺に近接して埴輪窯が営まれ、至近の距離に佐紀盾列古墳群が連綿と造営されていた。埴輪の特徴からみて、埴輪棺と両者との深い関連をうかがわせる。本文22頁参照（撮影／杉本和樹）



頭塔下古墳出土遺物

頭塔下古墳石室内より出土した遺物。轡、辻金具などの馬具、鉄刀、鉄鏃等の武器、土師器、須恵器ほか、様々な副葬品がみられる。出土状態からみて、石室破壊時にも撓乱されることはなかったようである。6世紀中頃の群集墳の副葬品としては一般的なものであるが、大和盆地北部での良好な調査例は少ないため、重要な資料となる。本文62頁参照（撮影／楠本真紀子）

頭塔の下で古墳発見

頭塔の基壇の下から、6世紀中頃の横穴式石室が現れた。頭塔の造立時に石室と墳丘の上半分が破壊されたのだ。規模からみて群集墳の1基だろう。本古墳の周辺に現存する古墳はない。しかし新薬師寺から頭塔に伸びる尾根上に、かつて多くの小規模古墳が存在し、周辺の開発で消滅したことが推定できる。

本文62頁参照（撮影／佃 幹雄）

上層頭塔の礎石と心柱痕跡

上層頭塔の心柱の礎石を発見した。地山面に礎石を据えたのではなく、第6段を積み始めてからの仕事である。心柱と礎石中央の突起は、ずれている。落雷による火災で頂部施設が焼けた後、心柱を抜き取って、穴の底に万年通寶・神功開寶を計121枚納め、焼土で埋め戻していた。頭塔を築く際の鎮壇具ではない。

本文58頁参照（撮影／佃 幹雄）